特別講演③

尾張藩・名古屋を中心とした江戸時代の医療の流れ

奈倉道治

尾張の国としての史料は積み重ねられてはいます。しかし、現在の名古屋市街地は、徳川幕府によって、西方諸大名に備えて作られた新興都市であります。

名古屋城は海岸にある熱田神宮より北に伸びる丘陵地の北端にその北側の沼地を見下す位置に作られました。天主閣は西方関ヶ原の山峡を望見しています。南側の市街地は碁盤割にして商業地としています。

鎌倉古道として関ヶ原を抜け、大垣より南東に濃美平野を斜行した道を、大垣より中山道として木曽谷に結び、東方の部分は、熱田、宮の宿より海上八里、桑名を通して鈴鹿越により近江草津へ結びました。これで名古屋市街地は京、江戸の往還からはずされました。

尾張藩の地域は、尾州一円八郡と美濃十八郡、木曽谷は東濃より信濃国、鳥居峠を越して贄川に及びます。この間に大垣藩、加納藩、岩村藩、苗木藩、郡上藩の小藩が点在しています。熱田、錦織、岐阜が御預り所となっています。この事は蘭学との接触、本草学と木曽谷の結び付きと関係して来ました。

尾張へは関ヶ原の戦後、最初に家康第四子忠吉が封ぜられた後、早世したため、甲府に封ぜられた義直が移封された。形成する武士団には、それぞれの地から集り複雑となっています。居住する町民は、最初の藩政の中心であった清洲か

ら半ば強制的に移住させられて、作り上げられました。

このように急造の都市に医療が形成された経過を、濃尾地震、第二次大戦に残された資料で綴ることとします。

江戸幕府成立慶長八年（一六〇三）より八代藩主宗勝が浅井東軒を招じた享保十年（一七二五）までの一二〇年を前半期、明治元年（一八六八）までの一四〇年を後半期、明治以降は西洋医学の時代となります。

前半期

清洲は尾張の中心地、医療を行う医師はそれなりに集っていました。そして名古屋へ移住はしておりますが、その様子は明らかでありません。この中より追い追い藩医にされたようです。

藩医の始めは、公式記録として、松平君山編の『土林沂洄』があります。御医師として、家系は書いてありますが、医修業の内容は不明のものが多いのが実情です。一旦藩医となった家系は、医術の一子相伝によるものでしょう。数代が書かれており、これ等の人々で、武士集団は対応されていました。

忠吉の最初の封地は、武蔵の国「忍（オシ）」であり、ここで宇津宮の医師、田代綱重を招いており、清洲、名古屋と移住して来ています。執政平岩親吉は曲直瀬道三に相談、山田意斎を招きましたが仕官せず、尾張の町医となってしまいました。次いで堀杏庵、加島道円と相次いで、道三の弟子を招いています。

児島元昌の他町医より、安倍順次、田中宗意、並河芳庵、石井盛菴の仕官の記録がありますが、ほとんどが没年のみです。世子も御医師となっています。明の遺臣張振甫が参加したのもこの時期です。

町医の中には、私の本家舎人家でも一時、牢人して、医師を表業に関東から北陸、九州まで廻り、大阪冬の陣の前に帰参した者もあり私の家の初代は医書を好み、三代目が俗医と記録されて医業をしています。三代目はどこかへ（武陵と記してありますが不明）へ遊学していますが、陳良甫の『婦人良方』による自学です。

二代藩主光友は谷田茂庵、山田玄祐、楠正刻、太田什庵、轟竹隠、住山見龍、野間降昌を招し出しています。

町医について、法橋等仕官した時は奉行へ届けるよう触出され（延宝五年、一六七七）医の情況把握に入りました。士農工商の埒外の扱いである医師です。医は別のネットワークで動いていました。

享保九年（一七二四）七月「覚」として

一、病家へ医師を招いた時、供の者や六尺に酒等をふるまう事を禁するお触が出され、医師側にも伝えたとされています。当時、医療への要求が強くなり、同時に町医統制の必要が出たと考えられ、京都より、浅井東軒を招じる事となったと思います。

後半期

藩主、三代、四代、五代、は早世六代継友は幕府医官井上玄徹の弟子竹田三益を召出しています。

享保十年十二月（一七二五）浅井東軒が京都より招かれました。父正純より教えを受けていますが、正純は味岡三伯に医学を受けていますので、曲直瀬東井翁の門下饗庭東庵の弟子ですから、後世派の別派、劉張医方派に属します。以後尾張は浅井を医督として流れて行きました。

高橋玄仙が継友につづいて七代藩主宗春の江戸にあっての奥医師をつとめていましたが、宗家徳川と政治向相争う時期でありましたが、東軒は宝暦三年七月（一七五三）死去しました。自筆の東軒漫録篇があります。

寛保四年五月（一七四四）各町内の医師の届出調査をしています。乗物、肩板、家持か借家か、歩行医が、そして医者無き町も届出させています。統制の基盤調査となります。

浅井図南、四十八歳ですが続いて京都より招かれました。宝暦三年（一七五三）ですが、山脇東洋の解剖が翌年の宝暦四年であり、蘭学が漢方に浸透し、漢方より折衷派へ移る医師が多くなり、京都漢方の最盛期でありました。図南はまた松岡恕庵の京都時代に本草学を学び、その他種々を学んでいますが、絵画でも京の四竹と呼ばれる名手でした。

当時、藤蘭宇も山脇東洋の門人ですが、この人は町医で通しました。服部艸玄も東洋の門人で、図南より後で奥御医

師となり、藩主に従属して、江戸にも出て医療面を受け持っています。

医業の一子相伝のみでなく、京都への遊学が増えて来ました。私の家の四代目も加藤謙斎の子玄順に、そして医督図南の京都時代の弟子となっています。

図南は名古屋の家塾では一二〇〇名を教えたとされています。著書は扁鵲倉公列伝割解等十六冊が数えられます。天明二年（一七八二）死去。

医学館

この家塾が後に発展、藩の組織に入れられましたが、御医師の子弟のみならず、町医の子弟町民でもしかるべき人に教育しています。

寛政十一年最初城内の別館へ、それから明倫堂内へ、そして明倫堂側の藩士の子弟の反対から、文化年間に蒲焼町の浅井家私邸に館が新築されました。後、柴山の時には、医学館薬品会を毎年六月十日に開き、公開することで一般人の教育をしています。（表紙絵図）

天明三年（一七八三）九月には医師による施薬の場合の届出を廃止して、今後は勝手次第としました。制度の整備が感ぜられます。

蘭方の導入として『撰所洋学年表』天明四年の項に「美濃人野村立栄劉英蘭学医学名古屋に立つ」と記入してあります。吉雄耕牛の与えた「授吉雄家学之秘条」が根拠となっていますが、これで蘭方医業が始まったとは考えられません。ただこの野村立栄が寛政年間以後の医家について多数の貴重な資料を遺しています。

解体新書の出版が安永三年（一七七四）ですから、蘭学の浸透は進んで来ています。

浅井貞庵、父の早世により十三歳で祖父図南より家督を継いで、医学教授の職を付けられてから、京都に出て勉強し

ています。七年に帰ってから大いに活躍し、門人三千名、著書四十五を数えます。文政十二年（一八二九）六十歳にて死去しました。

医師試問

貞庵は寛政十一年（一七九九）医学館修業者に修了の試問を命ぜられ、教授一名と共に二名で行い、本業は素問霊枢等、兼業に本草備要等を試問をしました。維新前七十年を教えます。

町医に対しても同様で、町医が養成する場合、開始を御役所に届け、十年前後の終了時再び届出を行い、御役所の選定した医師二名が試問を行い、認定しています。再試験もありました。医家の子弟も含まれます。

浅井紫山、江戸昌平黌で学び、父の死後奥御医師を跡ぎ、十二代藩主より「医学館」の扁額をもらう程でしたが、一族の中に高野長英の逃亡を援けた者があったりして、安政元年（一八五四）奥医師を免ぜられ、不遇のうちに万延元年（一八六〇）死去しました。

尾張における腑分けについて

石黒済庵、奥医師を世襲する家系であったが、文政四年（一八二一）罪人の解剖を新屋敷で門人三人の補助で六三名の見学のもと行なわれました。東洋の解剖から七十五年後である事は蘭学に対する取組みのおそさを感じます。

種痘所のこと

嘉永三年に発議され、京都有信堂、長柄春龍より教授を受けた鈴木容蔵が中心となり、今の栄交叉点附近に開設されました。これより先、奥御医師石井隆庵が開設の建議をしたのに対し、浅井紫山が反対しました。

医師相互の階級

家中における席次は、奥医師といえども低いが、診察という意味で藩主の近くに位置し、意見を述べ得る所から国手と呼び名がある。典医を含む奥医師以下八階級、町医には十名の御用掛医師以下御目見、一、二、三段、町医の順が並

べられています。

町医については年代を変えて四冊の医家姓名録を、その他寛政年間から天保五年迄五十年間、医家からその系譜を提出した文書をまとめた医家姓名録が野村立栄親子で残されています。奥医師浅井貞庵も含まれています。

遊学には柴山が昌平黌を選んだように江戸指向も出たのか、私家でも八代目道伯は片倉元周の許に文化十年に入門しており『産科発蒙』で勉強し、九代目は江戸より来遊された兼子元隣より産科教授を受けています。

施策としては、安永四年（一七七五）疫病流行に対し治療手抜の無い様にとのお触が出、天保十四年（一八四三）には医学館で浅井薫太郎に月四回位無料施薬を命じましたが、四年後に勝手許の都合として中止しました。

浅井樺園、柴山の長子で安政三年（一八五六）家の再興に努力しましたが明治維新と共に、医学館は閉鎖され、その任は終りました。

浅井国幹、樺園の長子で明治に入り、漢方医と洋医と対等の資格を与える様博愛病院を作り、東京温知社と共に政治運動を行いましたが志を達せず「告墓文」を残して終りました。

蘭学の流れ

野村立栄の耕牛よりの免許を根拠と出来ますが、水谷豊文、伊藤圭介に教えたオランダ語が植物分類からシーボルトと連り、伊藤圭介の鳴滝塾への遊学となり、立栄と長崎吉雄家との連りから、吉雄常三の尾張藩仕官奥医師となった事で一応の流入はありました。常三は私塾も開き、著書も残しました。その中の『新訳和蘭内外要方』には浅井貞庵が序文を書いていますので、浅井氏の蘭方との付き合いが伺われます。

大阪の適塾には尾張の地から、二名遊学していますが、大きな力とはなっていません。

中山道沿いの大垣藩の大垣に江馬蘭斎があります。杉田玄白、前野良沢に蘭学を学び、江戸にて名声を得ています。地の利を感じさせます。

飯沼慾斎もまた、植物分類学に業績を残しています。

尾張本草学

尾張藩の薬園は寛永～承応の間に家光から贈られた三九種の薬種栽培から始まり、御下屋敷御薬園六四〇〇〇坪あり、本草家松平君山が管理しています。

本草学者松岡恕庵は京都では浅井図南に、江戸へ出て小野蘭山に教えています。この蘭山の系統として、水谷豊文、伊藤圭介、飯沼慾斎もこの中に入っています。

伊藤圭介、水谷豊文らがシーボルトに、リンネの分類によるオランダ名を付けた植物標本一〇二種のうち間違いは四点で、他が新種であったとあります。植物の豊富な木曽谷、伊吹山を藩内にあった事も基盤にあったと思はれます。伊藤圭介は医師としてではなく、第一号理学博士男爵となりました。

明治以降について

維新後医学校が作られたが三年程で廃校、愛知医学校が明治六年発足し、十一年公立医学校となり、県立医科大学、国立医科大学となり総合の帝国大学となったのは昭和十六年、維新後七四年を経ています。

民間では好生館病院が戦災焼失まで医療、研究に活躍しました。

最後に江戸攻撃に向う官軍が尾張を通過し得たのは、青松葉事件という佐幕派の粛清があったからであり、残された人々は、北海道八雲村に移住しました。この方々に開村一〇〇年を期に、名大医学部協力で名古屋市が年一回検診を主とした医療班を送っています。

（日本医史学会東海支部）